会津喜多方会々報

第２号

東京・会津喜多方会

ご　挨　拶

会津喜多方会　会長　荒　川　　正

地元喜多方商工会議所のご尽力により発足いたしましたこの会津喜多方会も、]今年で６年目を迎えました。月日の経つのは早いものでございます。昭和52年９月銀座の東急ホテルでの創立発起人会が昨日のように思われます。この間毎年秋の総会には多勢の方々のご参加をいただいて盛会裡に催すことができまして会員相互の交流親睦を深める上にも大きく役立っておるものと思います。

これも偏に会員各位のご理解あるご協力によることは勿論でございますが、役員方々の献身的なる会運営に関してのご協力の成果であると深く感謝を申し上げるものでございます。

夜の繁華街で、会津ほまれ・磐梯山・などの看板をよく見かけますがこんなとき、ふと郷愁の思いにかられることがございます。

私共故郷を離れている者は心のどこかの片すみで故郷を懐しんでおるものでございます。

心の砂漠とまでいわれております東京のような大都会においては、物質や経済の至上主義がはびこり、ともすると人間の持つ人情のこまやかさ温い思いやりが欠けがちでございます。こうした激しい都会生活の中で、年に幾回かの同郷出身者の集いは、遠いふる里の山・河の四季を語り、田舎のおだやかな人情の厚さにもふれ心温たまるものを感じます。

特に秋の総会には喜多方よりも大勢の方々が故郷のにおいを持ってご参加下され、発展する街に変りゆく郷土を識り、旧友と語り、昔を懐しむ一時は心の温たか味を感じます、他に類のない喜多方会特有のものでございましょう。

結成してもう６年になります、この心許せる同郷人同志の交流が事業面でのつながりともなりまして、互いに益する成果の得るものでもございますれば望外の喜びと期待いたします。

会員各位にはこの上とも一層の親交を深め人間関係の向上につとめていただきたく存じます。最後になりましたが郷土喜多方の発展と会員皆様のご健勝をお祈り申し上げごあいさつといたします。

ご 挨 拶

会津喜多方商工会議所 会頭 小野寺 弥 吉

思い出しますと６年前、喜多方地方出身で、首都圏に在住する方々と、「ふるさと」とが相互に交流する機会を作ってはどうかとの話しがもちあがり、これをまとめるのに商工会議所で音頭をとってはどうかとの気運が出ました。当時の会頭であった故山中時一さんが、それでは、首都圏とふるさととの交流を深めコミニケーションを密にして、地域の振興ひいては地場産業の振興にもつながるのでは、とのことから、昭和52年度の商工会議所の事業計画に取り入れを検討、首都圏で活躍されている有志の方々と相談し結成の準備に入った。その後山中会頭の急逝があったが、故山中会頭の遺志を継いで、初代会長渡部辰巳氏を中心に有志の方々と会津喜多方会の結成にこぎつけた。

昭和52年11日23日、東急ホテルに於いて結成総会がもたれ、故郷喜多方をはなれ首都圏で活躍されている方々が、顔を合わせて非常になつかしく感激し、若い青春時代を思い、昔話に花を咲かせたものでした。

あれから６年、毎年、故郷の山河や風土、産業や生活の変化のありさまを首都圏の皆様に紹介したりして、その交流を深めて参りましたが、皆様の故郷に対する深い関心に敬意を表するものであります。

いま、会津北西部の喜多方地方は、他の地域に遅れない様振興をはかるために、数々の問題が山積しております。勿論私たちは、商工会議所を通じまして地域の振興に最善の努力をいたす所存ではございますが、中央の政界・財界・産業界・教育界・その他あらゆる分野に活躍されている皆様に、この会津喜多方会の交流により、そのお力をおかりいたしたいと存じます。そのためにも、この会の、今後のご発展をお祈りいたしますと共に、会員皆様のご健勝を祈ってご挨拶といたします。

５周年に際して

渡 部 辰 巳

会津喜多方会は本年で創立５周年になります。会津会は本年創立70周年です。会津会があるのに何故喜多方会が出来たのか、私は当時から会津会の副会長をやっていますから郷里の皆さんとの接触に於ては必ずしも不満ではありませんでしたが、地元の喜多方の人々には、会津会は若松中心の会だとの印象が強いので在京の喜多方地方出身者ともっと親密に交際したいとの願望から喜多方会が誕生した様に思われます。喜多方商工会議所が音頭をとって設立されたのもその為でしょう。創刊号で私は「喜多方会に入ってよかった」と思う様な会にしたいと述べましたが果してその様な会に進展したでしょうか。１年１回の会合でしかも２時間位でどれだけの心のふれ合いを感じますか。私は友人、知人が多いので一応満足していますが初めて入会した人は如何でしょうか。会津人は比較的引込み思案（よく云えば遠慮深い）の人が多く自分から話しかけることが少ない様です。これでは親睦になりません。同郷人の集会ですから遠慮することなく話し合うことが大切だと思います。１年に一度でもよいから昔の友人、新しい友達に会って過去を懐しみ未来への希望を持って人生を歩みたいものです。人生は一人では生きられません。人間関係によって生存しているのです。

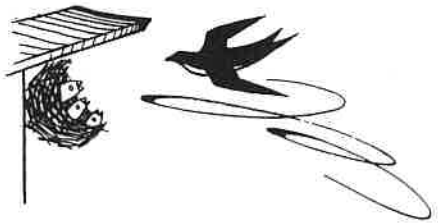
それならば先ず同郷の皆さんと親しくなりましょう。

私の体験を一寸述べますと、早大の学生時代から会津会に出席して学割の会費で酒を大いに飲み同郷の故陸軍大臣畑俊六大将に御世話になりました。同郷の先輩故鈴木寅彦氏（東京瓦斯専務、代議士、若松市長）にも大変御世話になり満洲鞍山の昭和製鋼所（社長は会津出身の小日山直登氏で後の鉄道大臣）に就職させて貰いました。先輩のお蔭です。終戦後、早大に就職のち自宅近くに会津青雲寮を建て郷里の学生の世話して来ましたが、当寮卒業生は150名余、第1回卒業生は渡部恒三代議士です。人間は話し合うことによって親しみを増すものです。

私は本年68才ですが、年と共に望郷の念、愈々強く故郷の山河を夢見ることも度々です。毎夏帰郷の際は中学時代（現在の喜高）自転車通学の帰途寄った菓子屋に今も寄るのが楽しみです。私共は同じ郷土に生れ同じ東京に住む者として、お互に助け合い励まし合って心のふれ合いを大切にし郷土の為、社会の為、生き甲斐のある人生を送りましょう。そしてこの会が益々発展する為には、もっと若い会員が多数加入する様努力すべきです。老若男女渾然一体となって会津喜多方会を盛り上げ、お互の人生を豊かにしようではありませんか。喜多方商工会議所の皆さんもよろしく御協力の程を願います。

最後に皆様の御健勝と御発展の程を切にお祈り申し上げます。

昭和57年８月　前会長



会津喜多方会会則

第　1　条　本会は、会津喜多方会と称し、その事務所は千代田区丸の内３丁目４番１号新国際ビル424区 星法律事務所内に置く。

第　2　条　本会の会員は、喜多方地方（会津北西部）出身者及び本会の目的に賛同するものをもって会員とする。

第　3　条　本会の目的は、会員相互の親睦を深めると共に、よき伝統をうけつぎ郷土の発展に資することを目的とする。

第　4　条　本会は、前条の目的を達成するため下記の事業を行なう。

2．名簿など関係出版物の発行。

3．その他本会の目的を達成するために必要な事業。

第　5　条　本会に下記の役員を置く。

2．会長１名、副会長４名、幹事長１名、幹事若干名（うち常任幹事若干名）監事２名。

3．会長及び副会長は、幹事会において推薦し総会の承認を得て選任する。

第　6　条　幹事及び監事は、会員のうちから総会において選出する。

2．幹事長及び常任幹事は幹事の互選とする。

第　7　条　会長は、本会を代表し会務を統括する。

2．副会長は、会長を補佐し会長事故あるときは、その職務を代行する。

3．会長は、総会、幹事会を招集する。

第　8　条　幹事長及び幹事は、幹事会を組織し会務を協議し、かつ執行する。

2．幹事長は、必要に応じて常任幹事会を招集する。

3．常任幹事は、総務、会計の任務にあたる。

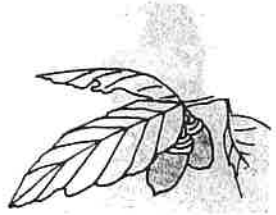
座談会　旧制喜多方中学校第5回卒業生

「真壁忠吉さんを囲み、話しあれこれ」

出席者

東京商船大学名誉教授　真壁忠吉
旧制喜多方中学校18回卒　鈴木外吾
同　23回卒　相原邦雄
旧制喜多方女学校6回卒　広瀬イネ
司会（文のまとめも）
旧制喜多方中学校19回卒　和田敏文

場所
東京都渋谷区渋谷
ゆーじん画廊
日時
昭和57年6月26日
午後6時半～10時半



司会　本日は、私どもの大先輩、真壁忠吉先生を囲み、先生のお話をお伺いしながら、ふるさと喜多方地方へのメッセージなり、心情の譜を綴って見ようと思います。

先ず、そのまえに真壁忠吉先生がこのたびの春の叙勲三等の栄誉に輝きましたこと、まことにおめでとうございます。

一同　おめでとうございます。

真壁　有難うございます。ただただ東京商船大学ひとすじに、その教育にたづさわってきたという年功に与えられたようなものなので、……。

司会　先生のお生まれは。

真壁　西暦1910年、1月20日です。

司会　と、いうと、明治43年……!?

真壁　そうです。72歳です。

司会　先生が入られた頃の、喜多方中学というのは、どういう中学校でしたか。

真壁　それまで、会津地区には会津中学一校しかなかったんですね。それで、喜多方の有志の方々の非常な尽力で、大正7年の春、喜多方中学は開校したわけです。

広瀬　大正7年なんですか。

真壁　ですから、みんなその開校を待っていたのでしょう。喜多方中学校の第1回、第2回の入学生には30代のお坊さんから、商店主など、年令差もまちまちで……。

相原　私の義父（長島三六）も1年待って入学した、第1回卒業生なんですよ。

真壁さん

鈴木　みんな、学校の出来るまで待っていたんですね。

司会　その頃の服装は。

真壁　洋服、たしか小倉服だったかな？

広瀬　詰襟の……。

司会　靴は。

真壁　えーと、カバンねェ。靴はどうだったか記憶ないなァ。

広瀬　フロシキじゃないですか？。

真壁　フロシキかなァ。小学校の時はフロシキに着物だったけど……。

司会　月謝は。

真壁　３円位だったかな。

司会　校舎は。

真壁　校舎は第一次欧洲大戦で、かなり物価が高かったんでしょうね。お粗末な感じがしましたよ。

鈴木　それでも、皆さん胸をふくらませて入学したんでしょうね。

真壁　私が入学した時、それではじめて５年生、４年生、３年生、２年生、１年生とそろったわけだから、５年生が一番うれしそうでしたよ。

相原　そういうことになりますね。

真壁　それでねェ。その校庭というかグランドは川原ぶちを整地したために、石ころだらけでね。

体操の時間など、体操はせずに土方作業ですよ。モッコかついで石拾いばかりでした。

その時の先生が佐藤次郎先生でしたよ。

司会　そうですか。そういえば佐藤次郎先生は第１回からの職員で、私

たちの頃はすでに喜多方中学の骨董的存在で、名物先生でした。

鈴木　漢文を名調子で朗読するのはいいんだが、酒の匂いをプンプンさせたりしてー。

相原　その頃の運動部は。

真壁　軟式テニス部が一番早く創部されたようですよ。それから、陸上競技、剣道、柔道部かな。

鈴木　野球部は。

真壁　大正10年頃かな。

相原　その頃から、中等野球は盛になり始めたのですか。

真壁　じつは、私も野球部におったんですが、野球の実際のプレイなどすべて、先輩格の会津中学から教わりました。

運動具屋も喜多方町には一軒もなく、用具はみな若松から調達しました。

鈴木　真壁先生は、単なる優等生じゃなくて、しかも当時いちばんハイカラな野球部員だったとはー。

恐れ入りました。（一同、笑い）

司会　その頃の校風は。

真壁　「質実剛健」「進取の気象」……。

相原　それは一貫してだったんですね。

真壁　待ちに待った、喜多方地方唯一の中学校です。先生も生徒も新興の意気に燃えていました。

事実、先生にも優秀な人材がそろっていましたね。

司会　進学率は。

真壁　第１回卒業生で見ますと、東京帝国大学へ５名位入学したはずで

広瀬さん

す。その中には竹田病院長をなさった塩川五郎さんもいます。

また、東京工業大学、文理大、陸軍士官学校、早稲田、慶応、中央、国学院など多士済々でした。

広瀬　喜多方には進学教室もなかったのにねェ……。

真壁　教室で勉強するだけで、別にガリ勉タイプでもなかったはずですよ。

司会　えらいですね。

真壁　ただ試験目当てに勉強するというような仕方じゃなかった。

それに、その頃の先生も単なる先生ではなくして達人だったような気がしてなりません。

中には豪放磊落というか、愉快な先生もいて、月給日になると、お清水の売れっ妓姐さんたちが小使室で勘定とりにきていましたよ。

鈴木　明治の気風もかんじます。

司会　人間味丸出しのところがいいですね。

真壁　そういうのを見て、中学生の上級生の中にはお清水遊びをする豪の者もいて、先生と鉢合せしてタマゲタよと教室で発表会を開くほどでした。（一同、笑い）

司会　そうか、生徒といっても30歳位の大人がいたわけですものね。

鈴木　町の老舗の後継者や近在の裕福な地主の跡継ぎも多かったでしょうからー。

司会　通信簿はあったんですか。

真壁　もちろん、ありました。

司会　その頃の通信簿は点数表ですか、甲乙丙丁ですか。

真壁　……？点数表だったかな。

相原　同窓会名簿で拝見しますと、１回から７・８回位までは大変いいところへ進学していますね。

真壁　そうですかナ。

鈴木　それはやはり新興の精神が横溢し、先生も生徒も情熱、意気込みがまるっきりちがっていたんでしょう。

相原　それがだんだんと……。（笑い）

司会　当時、中学校へ入学することさえ大変な時代、まして、さらにその上の大学へ進むということは……。

真壁　だから、大学へ進学しようとする者は殆ど官立（国立）を目指して勉強しました。

司会　真壁先生もー。

真壁　私は最初、陸士か海兵へ入りたいと思っていました。しかし、視力が悪くて断念せざるを得なかった。

すると、仲間の一人から「俺は東京高等商船を受験するが、お前も一緒にどうだ」と誘われて、受けたんです。

「商船学校」なんて、名前も何も知らなかったにのね。

広瀬　まァ、知らなかったなんてほんとうですか。

司会　商船学校は越中島でー。

真壁　そうです。越中島です。

司会　それで、入学試験の結果は。

真壁　いや、それが皮肉にも誘ってくれた仲間は入試失敗、学校の存在も名前も全く無知だった私一人が合格してしまいました。

人生にはしばしばこういうことが起こりますね。

和田さん

鈴木　そういうものかも知れません。

広瀬　そうですね。

相原　……。

真壁　ところが、私が東京高等商船を卒業した時は、大変な就職難時代でした。

相原　何年ですか。

真壁　昭和７年です。

広瀬　不景気な時代だったんですね。

相原　えーと、満洲事変は？

真壁　昭和６年です。

相原　なるほど……。

真壁　高等商船から、日本郵船へ入れることになっていたんですが、暫らく田舎へ帰って正式の本採用通知があるまで「自宅待機」するように言われて喜多方へ帰りました。

鈴木　「自宅待機」の元祖ですね。（笑い）

真壁　そういうわけです。私自身は田舎でのんびりしているのはよかったのですが、あいう町ですから、「あそこの息子は大学は出たそうだけれど、ブラブラしている」と、……。

広瀬　わかります。わかります。

真壁　私本人よりも家の者や親戚の者が参ってしまって、それでまた、東京へ戻り、姉の家に只で置いてもらいました。

広瀬　つまり、居候というわけですか。

真壁　ですから、姉よりも姉の旦那に気が引けて、結局は姉のところも

出て、別の下宿先を見つけて移り住みました。

卒業して１年１ヵ月、日本郵船からウーともスーとも何の連絡もないんです。

鈴木　それは難儀でしたね。

相原　身につまされるお話しですね。

広瀬　ほんと、ほんと……。

真壁　日本だけではなく、世界的に不況時代ですからね。

そうこうしているうちに、国会で「失業船員救済対策」という法案が可決され、そのため私たちのように未就職のまま自宅待機していた者までその恩恵に浴し、「無就職員」ということで日給１円もらえることになりました。

それで、ようやく生活が出来ました。

一同　そうですか。

真壁　それから昭和９年１月、はじめて日本郵船へ正式入社しました。

相原　随分永く待たせたんですね。

真壁　すると、会社は入社したら、即日、船に乗せるからそのつもりでいろというんです。

鈴木　待たせておいて、また、随分厳しい予告ですね。

司会　国策の線もあったんでしょうな。

真壁　そのとおり、船に乗って７年半、日本郵船におりました。

そうしたら母校の東京高等商船から「学校へ来ないか」と、しかも、好条件で誘われました。

まるで、仲人口なんですよ。

鈴木さん

広瀬　まァ！

真壁　「お前は勉強したいなら東大でも何処へでも留学させてやる」その仲人口に乗せられて母校へ戻りました。

それから東京商船大学ひとすじに歩んで参りました。それが私にとって生涯の転機となった次第です。

司会　そうして、このたびの叙勲の栄誉に輝やかれたわけですね。

さて、お話しもいよいよ佳境のところ水を差すようで恐縮ですが、もう一度逆戻りして古き良き時代の喜多方中学草創期の方にも興味があり、せっかくの機会ですので、真壁先生におたずね致します。

あの頃の中学生は、もちろんみんな徒歩通学、又は汽車通学だったんでしょう。

真壁　山都、塩川、野沢からは汽車通学。熱塩、加納、岩月、豊川、関柴……徒歩通学。片道、一里、二里はへいちゃらっですよ。

司会　自転車は？

真壁　自転車通学もいましたね。しかし、その頃自転車は贅沢品でしたね。喜多方の町には人力車があり、駅前にその待合室がありました。

広瀬　そうですか。

真壁　今、いちばん印象に強く残っているのは「食べもの」ですね。

広瀬　たとえばー。

真壁　生徒の中にはお百姓さんの家の者が多勢いましたから、季節季節の食べ物を持ってくることでした。

一同　ほうっ……。

真壁　弁当箱はいわゆる「ドカベン」が殆どですが、彼等は弁当のほか

に田植の時ですと、サナブリ餅とか赤飯のおむすび、秋になるとさつま芋のふかしとか栗ふかし、村祭りには田楽とか棒鱈煮ー。

鈴木　いやー、ほんとうによき時代のよき食べものですね。

相原　それこそ正真正銘の「自然食品」「おふくろの味」。

広瀬　化学調味料とか添加物など入っていませんしね。

真壁　甘柿や身不知柿を籠一杯背負って来て、先生や同級生の仲間に分配するのが趣味のような生徒もいましたよ。（笑い）また或る時は、教室中、納豆餅の匂いがしたりー。（笑い）

司会　すごく和気アイアイでしたね。

それに、先生と生徒の信頼関係、人間関係がキチンと決まっていたんですね。

鈴木　私たちの頃は、それこそ戦争の跫音とともに生まれ育ったわけ。すべてに軍国主義が先行していった時代です。

だいいち入学したその年から小倉服から国防色の制服になってしまいました。

それに、軍靴にランドセルというより背嚢かな……。先生に対する挨拶も脱帽の礼から敬礼に変わったりして……。

司会　そう。そう。

鈴木　教錬の教官なんか変に威張ったりしてー。

相原　つまり、本日の真壁先生の他は、私たちは大体、同時代をすごしてきたことになりますね。

司会　そのとおりです。そうして、戦火は拡大し、暗い世相へ突入するわけですが、しかし、まだまだ喜多方地方は平和な里でした。だから、強

相原さん

く心に残っている幼、少年時代の思い出はありますよ。

鈴木　私は小学校時代の音楽の先生です。

他の女の先生は和服に袴でしたが、その先生だけはモダンなセーターなど着こなして綺麗でしたよ。

佐藤梅子先生といいました一。

司会　ほんとうの「初恋」……!?

相原　そう、そう。

鈴木　喜多方中学時代には、英語の五来要人先生、国語の田崎治泰先生など、ちょっと喜中には勿体ないような先生がいましたね。

司会　教頭の長尾輝景先生のような「お前は学校のバクテリヤだ」と高圧な先生もいたけれど一。

鈴木　それでも仲間の数人と同人誌を作ったり、結構「夢」はありました。

司会　鈴木さんが５年生の時、紀元は2600年で、宮城前広場で全国中学校以上の奉祝式典があり、喜中からは確か山中弘道さんたちがえらばれて参加しましたね。

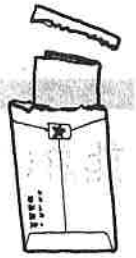
真壁　そうですか。鈴木君の時ですか。

相原　司会の和田さんが５年生の時、私は２年生で、和田さんが作っていた「青雲協会」に入ったんですよ。

広瀬　なんですか。その「青雲協会」というのは？

司会　いや、恥しいことで……。

教会で讃美歌を唄ったり、キャンプをしたり、絵を描いたり、詩を作ったり、要するにハカナイ抵抗というか、やり場のない青春をただ暴発させていたわけで一。



相原　女学生を誘ったりして一。（笑い）

鈴木　とにかく、私たちはそういう時代をくぐり抜けて、日本自体、考えても見なかった歴史の裁判をうけ、昭和20年から新生の歩みをしたわけ……。

司会　ですから、私たちは私たちの先輩も含め喜中同窓生の中から多くの戦死者、戦病歿者を出しています。

そういう仲間たちの十字架を背負って、私たちは生きているわけです。

真壁　そのとおりです。今日の国家の繁栄、地方自治体の平和もそういった人々の尊い犠牲の上にあるものです。

——忘れてはなりません。

司会　東京の「会津喜多方会」の親睦をさらに深めるためにはどうすればいいか、最後に一言ずつお願い致します。真壁先生どうぞ。

真壁　喜多方会の性格をもっとハッキリして欲しい。

鈴木　場所にこだわらず、皆さんが集まり易いホテルか何かにしたらどうでしょうか。

相原　親睦のアイデアをもっともっと活かして、皆さんが年に一回のこの集まりを楽しみにするようにすべきだと思います。

広瀬　そのとおりだと思います。真壁先生のお話しにありましたように、郷土の食べものをメニューに必ずえらんでそれを目玉にするとか……。

司会　或は逆に東京から会員が喜多方へ集り、地元と合同で「ふるさと祭り」するとか工夫して欲しいのです。仲間がどんどん増える会にしなければ……。もっと親睦に徹して一。

本日は長時間、おそくまで有難うございました。

熊倉にある中根米七の墓

磯　部　秀　夫

(1)

私の生れた喜多方市熊倉の墓地に元会津藩士中根米七の墓がある。中根米七という人は明治九年政府を転覆しようとする一味の者が惹き起した東京思案橋事件の主謀者の一人であった。

その墓は熊倉の北の方の村はずれ、杉の下（小字の地名）という所にある墓地（俗称旧墓の入口）の脇にあり、墓地の前を通る農道に面して建てられている。その墓は一般の村人の墓に劣らない大きさの立派な墓で、土台石の上に建てられている。その表には

義士　中根米七之墓

と刻まれており、右横には「明治22年５月16日建立」とあり、左横には次の歌が書かれている。

身をくだき骨を野山にさらすとも
日本心の色変らめや

これは米七の辞世の歌である。

私は大正15年まで、明治、大正の少年時代を熊倉で過ごし、その少年時代にはお盆や法事の度毎に父母や姉に連れられて先祖の墓に詣でたが、その帰りには必ず中根米七の墓に線香や花や団子などをあげて合掌して帰るのが例であった。その墓に詣でるのは私の一家だけではなかった。殆どの村人全部がそうしておったように思う。最近聞く処によれば今でもそれは同じだという。

私が少年の頃父から聞いた話では、中根米七という人は、敵に追われてここまで来たが、ここで切腹したのだということであった。その頃私はまだ少年であったので、その話には余り関心がなく、それ以上詳しくは聞かず、多分その人は明治元年の会津戦争の時、政府軍に追われて来たのであろうと独り合点していた。

ところが最近——といっても10数年前からのことであるが、明治維新前後の歴史に関する幾つかの本を読むうちに、中根米七は会津戦争の時に切腹したのではなくて、明治九年東京にあった思案橋事件の主謀者の一人で、官憲に追われて熊倉まで逃れ来り、その事件の２年後明治11年にその墓地で切腹したことを知ったのである。

(2)

思案橋というのはもと、現在の東京都中央区日本橋小網町にあったが、大東亜戦争後川が埋め立てられてしまったので、今その橋はない。昔その橋の下を流れていたのは東堀留川で、橋のたもとには幾つかの舟宿があり、そこで舟をやとえば東京湾に出ることができた。

思案橋事件というのは、明治９年10月29日の夜、かねて明治政府を転覆しようとして謀議していた元今津藩士永岡久茂を首領とする10数名の者が、思案橋のたもとにあった舟宿から舟をやとって千葉県に渡ろうとしたところを警察に探知され、警官と大格闘の後捕えられたという事件である。

その事件の模様については、綱渕謙錠氏著「苔」、高橋哲夫氏著「明治の士族」等に詳しく書かれているが、そのあらましは次の通りである。

先ずその時、明治政府を転覆しようとする叛乱に加わるべく参集したのは会津藩士永岡久茂を首領とする中根米七等十数人で、その夜三々五々舟宿に集ってきた。そして小舟５隻に分乗して舟宿の主人に対ししきりに出舟を促したが、舟宿の主人は一行の様子を怪しみ言を左右にして出舟を遅らせ、日本橋警察署に密告した。そのため警察から警部補と巡査３名が急行し、一行の乗船理由などを訊問した。時刻は夜の11時頃で、その夜は月もない真っ暗な夜の夜中である。

永岡等は最初は百方言葉を尽してその場を逃れようとしたが、どうしても聞き入れられないので、一味数名の者と共に陸の浅橋に上り、警官を包囲し隠し持っていた刀を抜いて切りかかり暗闇の中で乱闘の末、警部補を倒し、巡査1名に重傷を負わした。(その巡査は翌朝死亡) 他の巡査2名も軽傷を負ったがその場を逃げ出し、そのうちの一人が近くの火の見櫓に上って半鐘を乱打し急を報じたので多数の警官が出動する。

永岡は闇の中の乱闘で誤って同志の一人に腰を切られ、身体の自由を失ったので、数人の同志と舟でその場を逃れ、永代橋まで逃げたが、警史の舟に追跡されて逃れる途はないものと観念し抵抗をやめて同乗の同志と共に捕縛された。その他の者はその場から町の方に逃げたが、厳しい官憲の追跡の結果、ある者はその晩、ある者は数日後それぞれ逮捕されてしまった。しかし中根米七だけは厳しい追跡を逃れて、それから2年後会津の熊倉に入って自刃した。

これが事件のあらましである。

彼等がその行動を起した直接の動機は、その首領永岡久茂と、かねて交友関係のあった山口県萩の前原一誠から永岡に、反政府のため挙兵するという暗号電報が入ったからである。その暗号電報は

「ニシキノミセヒラキコンニチ」(錦の店開き今日)

というものであった。永岡はその電報を見て、東西相呼応して兵を挙げようと決心し、前原に対しては、こちらも直ちに挙兵するという暗号の返電を送ると共に同志一同と図り、先ず千葉を拠点として挙兵を図ることにした。しかし彼等の計画は、彼等が千葉に渡る前に思わざる警官殺傷事件となり、その一歩をふみ出す前に挫折してしまったのである。

かくして逮捕されたこれ等の者はいずれも重罪人として投獄されたが、首領永岡は前述の如く思案橋における暗夜の乱闘の際、誤って同志の者から受けた腰の傷がもとで、判決を待たず翌年1月12日獄中で死亡し、その他の者は斬首(3名)又は懲役の刑に処せられた。

しかし只一人逮捕を免れて逃亡した中根米七だけは2年後熊倉に行って自刃した。

(3)

中根米七は文政3年(1820)熊倉から凡そ5キロの所にある金森という村(現在は塩川町金森)に生れた。生家は代々地付の藩士であった。米七は長じて文武の芸を日新館で学び、武術は相当の腕前となり又よく漢書を読んで学門の道にも熱心であったようである。米七が42才の時、藩主松平容保が京都守護職となるや、これに従って京都に行き、慶応4年の鳥羽伏見の戦にも参加したという。

会津戦争による会津落城後、何時の時か東京に出て来て、後で思案橋事件の首領となる永岡久茂等と交るうち、永岡等の主張に共鳴し、一味の政府転覆の計画に参加することとなる。

その首領永岡久茂の経歴については、ここにその詳細を省略するが、元会津藩の上級藩士で会津藩が会津戦争に敗れて青森県下北半島の斗南に移封されたとき、藩の小参事となり藩経営指導者3人のうちの一人となった者である。

その永岡を首領とする元藩士の一団が、言論によって政府を攻撃するのはともかく、武力を以て政府を転覆しようというような無謀と思われる考えを持つに至ったのは如何なる理由によるものであろうか。

その表面的な理由は、逮捕された彼等の裁判の口述書によれば、「新政府の内政外交は共によろしきを得ず、無禄となった旧藩主を初め多くの士族その他の国民は生活に困難し、外交は軟弱にして外国の侮りを受けるに至る。これ等は何れも政府の失政によるものであるから、在廷の大臣参議を誅殺し、一旦政府を転覆せざれば皇国の維持は覚束ない」というのである。

これ等表面的な理由はともかく、彼等、特に会津藩士等の心底に流れている共通の思いは、先の会津戦争において、会津を故なくして朝敵の汚名

を着せ、徹底的に会津を攻めて言語に絶する悲惨な結末を告げるに至らしめた薩長に対する怨みと、薩長を中枢とする藩閥政治に対する反発があったことは間違いないであろう。

(4)

中根米七は思案橋事件の後、一人逃れて熊倉に行き切腹した。切腹したのは明治11年８月であるから事件があってから約２年後のことである。その２年の間彼は厳しい官憲の追求を逃れて、一体どこに逃げ、どこに隠れていたのであろうか。それは必ずしも判然としない。当時の新聞の報道として伝えるところによれば、或いは一時越後に逃れたらしいといい、或いは西南戦争に西郷軍に加わり転戦したらしいという。しかしその何れも間接的な伝聞によるもので確たる証拠があるわけではない。

何れにしても彼は最後に生れ故郷である会津に帰り、その生家（塩川町金森）に近い熊倉まで行って、遂に逃れ得ぬものと観念し切腹したのである。

米七が切腹したのは明治11年８月23日（新暦）。熊倉に行ったのはその前日（22日）の夜である。友人３人（２人という言い伝えもある）に付添われ夜遅く熊倉に着いた。この３人のうちの２人は米七の旧知の友人で、彼等は恐らく22日の昼喜多方小荒井村で落ち合い、米七に同行したものと思われる。その夜多分11時頃、熊倉に着いた一行は、村の一膳飯屋高倉屋の主人をたたき起し、あり合せの肴を以て酒を飲みながら夜明けを待って杉の下の墓地に行き米七は切腹した。

友人３人のうち２人は検死役となり、一人は介錯人となってその自刃を確認した。米七の墓に書かれてある彼の辞世の句は多分高倉屋で自ら書いて友人に渡したものであろう。米七、時に行年59才であったという。

高倉屋は私の生家から北の方約150米程の所にあり、私の子供の頃（大正時代）には普通の農家で店は出していなかった。

なお、私が亡くなった父から聞いた話では、米七の墓を建てたのは当時の村の人達であったということである。当時政府の転覆を図った大罪人とはいい乍ら、会津を倒した新政府、特にその中枢を握る薩長に心のうちでは好意を持たない何人かの村人が、米七の心情を憐れみ、その霊を弔うために建てたものと思われる。墓が建てられたのは明治23年、米七が切腹してから11年後のことであるが、米七の生家は勿論、その縁者で大罪人である米七の身寄りの者であると名乗り出て、墓を建てようとする者もなかったからであろう。

私の子供の頃、中根米七の墓のそばには桜の大木があって、春になると爛漫と桜の花が咲き乱れ、大変きれいであったことが幼ない頃の記憶として残っている。

襷(たすき)の話と昔の遊び

小田付　芳賀　庄三郎（旧関本）

テレビドラマを見て居ると、明治、大正時代の場面でおかしなところが目につく。襷(タスキ)を掛けて客座敷に入って来て、主人や客に応待している。エチケットとしては襷は外して、応待するものである。

現在にはない風俗で若い人の演出だから仕方があるまい。

昔話だが、働き者の小母さんが朝から晩まで働きづくめでその着物の襷のある部分は模様が消えていたそうである。

秋田の姉の話であるが、東京から遊びに来た孫娘が、台所で襷をかけて仕事をしてるのを見て「おばあちゃんどうしてそんな格好してんの？」ときくから「おばあちゃんはネ、仇討に行くんだヨ」といって笑ったが、襷の掛け方を教え昔の女の人はみなこうしてお仕事をしたんだと話してきかせた。

次の朝、孫娘は洋服の上に襷をかけて「お手伝いするワ」と台所に入って来たので大笑したとの事だ。

角巻に御高祖頭巾などは今生きている人でも60才以上の人でないと覚えていまい。

戦後の風俗でなんともいただけないものが流行って来た。ジーパンである。明治で会津生れの私には「猿(サル)ッ袴(バカマ)」としか映らない。長くボロボロの裾をズルズル引摺ってペチャンコのサンダル履で、他人の家を訪れる若い娘さんが居る。

女の子のハンバーガーの立ち喰いも抵抗を感じる。日本的な礼儀作法もスッカリ忘れられたのだろうか。

忘れられてしまったものがまだある、子供達の遊びの色々である。昔は、自然を利用し、遊び道具は自分で作って遊んだものだ。喜多方のその頃の子供の遊びでなつかしいものを憶い出して見よう。

「石蹴り」「陣とり」「竹馬」「コマ廻し」「とりもちで蝉取り、雀とり」「兵隊ゴッコ」「チャンバラごっこ」「輪まわし」「木登り」「樹上の小屋掛」「流動円木」「竹トンボ」「竹ヒゴ飛行機」「ペッタ」「どん」「兵隊将棋(ショウギ)」「紙筒電話」「試膽会(きもだめし)」「ゴム皮パチンコ」「針金ピストル」「竹筒製紙鉄砲」「水鉄砲」など、女の子では「竹らつき」「兵法(ホー)つき」「あやとり」「ギヤマンがけ」「一寸とび」「数え唄」「紙人形」「折紙」「オチャメンコ」など、お医者さまゴッコはやったかどうか忘れてしまった。「ジャンケン」は喜多方では「キツキツキッタイ」といった。勝ったとき「ロンロン!!」と言っていた。冬は足駄で固める雪玉造り、ゲロリ下駄スケート、足駄での横滑りなど凍った路上で技を競った。子供達の遊びまでが自然味から離れ、野性味を失い、創造性を育てるチャンスがなくなってしまった。

「既製の玩具で、与えられるもの、しかもワンタッチ式になってしまった。あの頃の動く玩具はぜんまい捲きのブリキ製か、ゴム動力のもの位が小遣いをはたいて買ったもんだ。名前の面白いものに「デツキンプー」と言うのがあった。現在は、バッテリー動力から、もう既にマイコン、コンピューターのの域に達している。

デパートで買った「甲虫」が死んで動かなくなってしまったので「お母さんバッテリーを入れ替えて!!」と言う子供がいる昨今である。笑い話で済まされぬ事ではあるまいか。

学校の遠足といえば「わらじ」を履いて、弁当の風呂敷を背負い３里（12㌔）５里（20㌔）と歩き通したものだったが、柳津への十三詣りが憶出に深い。今はリュックにスニーカー豪華なリクライニングシートの観光バスでの遠足は、日本通運の「戸口から戸口まで」の標語の通り、宅送便の如しだ。老人クラブの旅行とチットモ変らない。肥満児や、骨折のしやすい学童の増えるのも無理はない。

会津弁でも忘れた言葉が沢山ある。

「アラ越後屋のオガツアマでねいがし、ちと寄っていがんしょ」

「何処サ行って来らったし、さあこっちゃ来て炬燵にあだらんしょ」

「そんじゃハァごめんなんしょ、分家のおんッアマが永く、ガォッてらっただげんじょ、こねいだ病院に入院しらったもんだがら、見舞に行って来たのッしょ」
「今日は孫の誕生日で〝おごわ〟蒸したとこだから、何もねいげんじょ、食べてってくなんしョ」
「のっぺ、のっぺ、ごつツオになって申訳ねいなし」
「サアおだちしてくなんしョ」
「いやもう本当にいただきやした、ザンメイしてくなんしョ」
おんッア（小父さん又は馬鹿）せな（兄貴）にしゃ（お前）はつッける（平手で撲る、貼りつける）くらつけんぞ（げんこで撲るゾ）おんツァれる（叱られる）ごせやいた（気嫌悪くした）
「ズブデ、フウデデ、セイデモセイデモ、アグッウヨナガッタシ」
（まるで積雪が深くて急いでも急いでも歩を進めることが出来なかった）

私が中学校のとき入田付から通ってた生徒が遅刻して英語の先生に遅刻理由を喋った言葉である。先生は独逸語かと思ったと言う。会津弁で一番やさしく聞える言葉は「そうかよ」と言う。娘さんなどが首をかしげて言うととても風情がある。

序に昔子供の頃の菓子、おやつのことなど書いておこう、屋台を担いで来る飴細工、おしんこ屋、屋台で吹矢で当てるこんにゃく田楽、飴煮のするめ、めくり紙くじで当るキンカ糖、ハッカ紙（日本紙にハッカ糖を染ませたものをしゃぶる）ゴムせんべい（今のガムか？）よし竹の吹口のついた三角袋の麦粉菓子。ベッコ飴、お祭りのとき珍しい呼び売りに「シャリシャリのカリカリ」（南京豆入りのキンカ糖）なんてなつかしい。

菓子ではないが鎮守様の境内でカーバイト灯の臭いと「何んでも１貫（10銭）だよ、何んでも買いなァ」とかんざし、ゴム櫛などの面箱店「のぞきからくり」の「大人は二銭小人は一銭、片目は半額だヨ」なんて呼び込みなど憶出はつきない。

又、河原の野いちご、桑の実（クワゴ）で着物を汚して叱られたものである。

会報第2号　昭和57年　5周年

ふるさと・ア・ラ・カルト

喜多方あれこれ

山　中　善一郎

休日に、蔵のまちの見学者が目立つ。例によって黄色いパンフレットを持って、多くの人が歩いてゆく。ただ惜しむらくは、裏通りの人目にふれず、ヒッソリと息づいている蔵を見る人は少ない。それに観光客の多くは、何故に蔵が多いのかとは問わないし、街の人も、あまり説明はしない。消えゆくものへの郷愁はあっても、関心は意外に少ない様だ。

４年前に、D・キーンが来町した。中央公論に福島紀行として、のっている。彼は、その中で喜多方に触れ、雄国の山々の稜線を背景に持つ白壁の家の風景を、大和についで、日本では美しいものと激賞している。ついで、長床や勝常寺の仏像も高く評価し、山都からの阿賀野川の美しい流れにも驚いた。しかし喜多方の観光協会も何らの反応も示さなかったし、街の多くの人々もこれを知らない。

６月のある日、藤原弘達が来て、市民の前に例によってブチ上げた。電工も農業も、サヨウナラ、Ｉ・Ｃよ、今日はといったとかである。アルミ不況は街を覆って久しい。若年層の流出は、十市の中で依然としてトップである。37,000の街で、４つの県立学校を持つのも珍しい。しかし喜高からの進学の内容も決して楽観を許さない。予備校に払う費用は、２億円を上廻っている。

今日も飯豊の山々は白銀に輝き、白雲は悠々として流れてゆく。私達の孫達も、夕陽の中で、蹴びはねている。然し、この小さな美しい街で、政争の声が消えないのは不思議である。民報誌でさえ、敵の牙城と表現した。異なる考えも併存しなくてはいけない。漸く、新幹線も開通した。その光と影は、やがて明暗をなげかけ、スピード化によって、多様な変化をもたらするだろうが、そろそろ喜多方の市民も、小異を捨て心から手をつなぎ大同につくべきときではなかろうか。

もうひとつの故郷

鈴　木　政　子

喜多方生まれの喜多方育ちの私ですが、４歳から10歳までの期間だけ、喜多方不在でした。その不在期間を過した中国（旧満州）を37年ぶりに訪れ、帰ったところです。

喜多方に住む両親に行ってもらいたいと、私たち子供は願ったのですが、父は、「忘れよう、忘れようとして来たのに、いまさら行きたくない。お母さんを連れてってくれ」と言います。そんな父の気持も解るので、72歳の母といっしょの旅になりました。私は母のめんどうをみるつもりで出発しましたが、同行26名の方々の言によれば、やはり娘は母に連れられて歩いたようです。

中国はいま近代化の途上にあり、みんなが意欲的に顔をかがやかせて、その建設に取り組んでいました。

かつて住んでいた土地も、町並みは変りましたが、山や河、人々はかわらずあたたかく我々を迎えてくれました。そしてふしぎなことに、そこに行ったとき、私は喜多方に帰ったときと同じに、ホーッと安堵した気分になれたのです。やはりここも、喜多方と同じく、私には「ふるさと」だったのだと思いました。

敗戦時、私たちはここで襲われ、牢につながれ、のち、ひどい難民生活を送りました。母はここで４人の子を栄養失調で亡くしました。子供だった私には被害者意識だけ強く残っていましたが、15年戦争で中国がより多くの犠牲を払っていたのだと愕然としながらも加害者であったことも知りました。戦争というものは、おたがいに傷つくことであり、それはまた永い間、世代をこえて人々の心を傷つけているものだということも解りました。

私は中国の大地に「あの時はごめんなさい、お世話になりました。」と念じ、加えて、中国の土となった弟妹たちに「かあちゃんと、ねえちゃんが、日本のあったかい空気を持ってきたよ」と呼びかけながら、しっかりとこの手を押しつけてきました。

母は小さい石ころと、いま青々と繁っている柳の葉を押葉にして持ち帰りました。その石ころは母から父の手を経て、喜多方の遺骨もない弟たちの墓地の土の中に同化させるということです。

「気がすんだ」とひとことももらした母の37年間の苦しい心の旅路は、ここでひと区切りするのではないかと、この娘は思うのです。

喜多方からは、はずれた事を書いてしまいましたが、いま私の頭の中はこの事で占領されていますので、少々、吐き出させていただきました。なお、この敗戦時の中国からの引揚げの記録である拙著「あの日夕焼け」（立風書房刊）に関しましては、喜多方関係の方々にたいへんお世話さまになりました。心からお礼を申し上げます。ありがとうございました。

「あの日夕焼け」と云う本が鈴木政子さんから贈られて来ました。ご紹介しましょう。

地平線に沈む真赤な大きな太陽を背に、首から紐でつった箱を下げて物売りをしている少女、戦後の暮しを助けなければならなかった鈴木政子さんの健気な姿が、そのまま表紙になっています。果てしなく続く満州の荒野で、暗黒の敗戦時を強く生きぬいた、小学校の校長先生ご一家の愛と死と生との闘いの体験記です。鈴木さんは、中学生と小学生になられたお子様に、10才だった母さんが「満州でむかえた戦争、終戦の時のお話しをしておきたい」。「戦争って、かっこいいもんじゃないんだ」と、云うことをわかってもらいたい、とおもって記されたということです。

この度は北天の星となられた４人の弟妹達を偲んで、喜多方のお母様と一緒に中国へ行かれた折の手記をお寄せくださいました。（K）

40年の空白

高　橋　幸　男

今年の４月下旬、友人和田敏文君の誘いで喜多方を訪ねる機会に恵まれた。私にとっては40年ぶりの、まるで浦島太郎のような帰省であった。それにしても40年も故里へ帰らないというと、いかにも理由(わけ)あり気に聞こえるが他意はない。私が喜多方生れではないというのが大きな理由である。そのため喜多方には私の係累というものが一人もいない。当然、菩提寺もないので墓参りに帰ることもなかったということである。

それでも喜多方を故里と決めているのは、私を育ててくれた土地だからである。小学校の６年から中学の一年間を中にした10年間を私は喜多方に住んだ。戦争を生き抜いて来た大正生れの私にとってその10年間の多感な青春時代は、私の人間形成の上で故里と呼ぶ以外の何物でもないと思っている。

この３・４年来、故里志向が高まり、喜多方を想うことしきりだった。人間の帰巣本能とでもいうのか、或いは老化現象の現われなのか、昔を憶い出しては雑文にして楽しんだりしていた。想い出は美しく誇張されるものだが、喜多方の想い出の一つ一つが私の青春の風物詩となっている。

歴史と風格を感じる土蔵店の町筋、蔵の白壁に柿の木の葉影がゆれる裏通り。プラタナスの並木路に打水されていた明るい感じの女学校通り、あの街だけが、蔵の町喜多方にそぐわない妙な新しさがあった。数え上げれば沢山の美しい記憶の絵が浮かんでくる。それを詩に書けたらと思ったがなかなか思うよう行かず、詩作のためへのプロジェクトとして、なんの脈絡も関連もないメモがあるので恥を忍んで拾い出してみる。

角を曲がると白壁
黒い影を曳いて
女学生が通る
そんな露地裏に時は蘇る。

夕暮
あのひとの声が
厨からきこえてくる
寺町通り。

どこへ行っても芒
どこを歩いても白壁
冬への簡素な序曲。

雪ひそとしてふり
角巻の女が
ソフトフォーカスで
近づいてくる。

棒鱈が凍えていた
㊀魚屋
町はただ雪の中。

おあいなんしょ
おあいなんしょ
あったかあい挨拶。

料亭と映画館
女学生の通学路
禁じられた遊びが
いっぱいの幸町。

春は茫洋
押切川は
野火の饗宴
遠く飯豊は残雪。

今回の旅は和田君のプランにそっくり便乗して、一緒について歩くだけの大変気楽で横着な旅行であった。

東京から浜通りを北上していわき市の友人を見舞い、その夜は山都町の和田君の実家にお世話になった。暫らくぶりに会津の美味佳肴をご馳走になり、昔ながらの山都町の美しい風景に眼を洗う思いだった。故里とはこのような町を云うのではないだろうか。故里のすべての条件を備えたような町であった。駅も昔のままの姿だ。ホームに建っている赤煉瓦の小さな倉庫、そのかたわらには満開に咲きほこっている桜の古木。ホームにはタブレットを肩に白手袋の駅長さん。山高　登の版画にぴったりの風景である。

喜多方までわずか一駅だが、阿賀川の風景を楽しむことができた。ほんの20分足らずで喜多方駅に着く。40年振りの喜多方が今私の眼の前にある。

駅前の広場には数台のタクシーが客待ちをしていた。人の往来も少ない。何処の町でも見られる駅前の喧噪もない。むしろ寂寥と云った感じがする。寂しすぎる風景とでも言ったらいいのか。タクシーのいる広場から、昔のままに広い道が北に向って走っている。土産品を売る店と、何度も写真で見ている「煉瓦」という喫茶店だけがすぐ眼に入る。赤煉瓦の建物だけが浮き上って、周囲の殺風景な街にとけ込めないでいるような感じがする。

街の方を眺めながら立っていると、なんだか物足らないような失望を感じて来る。私が考えていた喜多方は、こんな心寂しくなるような街を作る筈がないと信じこんでいた。

昔の裕福で品格のある町づくりをして来た人たちが、時代の変遷とは言え、こんな佗しい駅前通りを作ることが理解できなかった。

この広場と此処から始まる通りには一本の街路樹も一叢の花壇もない。ただ渇き切ったような街が見えるばかりだ。なんと云う潤いのなさだろう。町の顔とも云うべき駅前がこれでいいのだろうか。

しばし茫然と立っていると、和田さんが「喜多方砂漠」と一言つぶやくように言った。この言葉は、喜多方が大好きな和田さんの悲しい喜多方への挨拶ではなかったか。緑がないと言われる東京から帰って来た人達が真先に故里に緑がないと思うことの寂しさ。観光客ばかりではない。望郷の思いを抱いて帰省する人々がこの駅に降り立ったとき、果してどんな思いを抱くことだろう。もっと思いやりのある風景で迎えてあげるのが人情ではないだろうか。

私は駅前にデパートや商店街の賑わいがないと言って苦情を言っているのではない。むしろ反対に現在のような静かな駅前で結構だから、せめて夏には涼しい樹蔭を、春には心のなごむ花壇の一つもあるような、緑のある駅前を願っている。

市内を見物するうちに、再び駅前で感じたと同じく、緑のない街を見ることになってしまった。雪国だからということで緑がないという理由にはならないと思う。

青葉若葉の４月、花の盛りというのに街には美しい若葉の並木も花の賑わいも見られなかった。わずかに母校の校門前の桜並木に満開の花を見た

のが慰めであった。昔私が住んでいた幸町のプラタナスの並木もなくなり、殺風景な市役所が建っていて昔の面影は全くなくなっていた。市役所通りと言えるようなきれいな通りではなかった。公共の建物は市民に親しまれ愛される明るさと美観を備えているのが普通だが、喜多方の場合はどうしてなのだろう。他所の市では大抵公園とか美しい風致地区がまわりにあるのが普通だが、一寸不思議な気がした。

懐かしい押切川へも行った。雲一つない碧い空の向うに飯豊山が真白に輝いていて、こればかりは昔のままだった。この河川敷には喜多方プラザと呼ぶ文化施設が建設されて押切川は廃川の運命にあると云う。

昨年の「市民の友」という新聞を見たら、「席」という欄に次のような市民の声がのっていた。

「喜多方にはこれぞといった花見の場所もない。昔の駅前通りや中学通りの桜並木もなくなり、西川原の名物月見草も消えてしまった。竹久夢二の愛した宵待草のふるさと西川原のイメージを守ってほしい」という意味の投稿である。こう云う願いは市民の方々全部の願いかも知れない。これに関連する話として6月1日の朝日新聞「とうきょう緑風記」というコラムに、若者の街である東京原宿について1,000人の若者から「この街の魅力とイメージは何か」というアンケートをとった所、3位が「緑と憩」という回答であったそうだ。これは一寸注目すべきことだと思う。原宿族と云われる若者たちが緑蔭に憩を求めて集まって来ると云うことは、街がいかにファッション化し高層近代化されようと、緑のない所に人間の生きる生活風景は考えられないということではないだろうか。

現在喜多方には2,000を越える蔵があり、それが皆日常生活の中で息づいていると云う街は全国でも類を見ないすばらしいものであるが、蔵があると云うだけで観光都市として立ち行けるものとも思えない。街全体の調和であるとか、多くの条件が必要と考えられる。喜多方プラザという文化施設の完成と共に、「蔵の町」喜多方が本物の観光都市として市民の生活

環境との調和を保ちながら、市の起死回生の事業となることを心から願っている。

現在地方都市の自立と云うことが叫ばれ、各地方それぞれに政策面に於いて苦慮しているようであるが、大分県のように「一村一品のすすめ」という運動で地場産業による自立が成功している所もあれば、岩手県の遠野市のように産業に依存しない文化観光都市を宣言して財政難で失敗しているなど様々である。喜多方が今後どう云う道をとるのか大いに期待するものであるが、因に数年来の市の高額所得者一覧表を見れば市の現況が推量できるというものである。この表の内容が大きく変った時、初めて新しい市の発展があるのではないだろうか。

他所者が実情も知らずに、好き勝手な御託をならべ苦情を言って、お叱りをうけるのは当然と覚悟の一文ではあるが、喜多方に恋焦がれている男が40年ぶりに恋人に想いのほどを訴えていると思ってお許しを頂きたい。

今度の旅行では級友の星竜馬君に大変お世話になり面倒をかけた。彼はサイクリング観光という名案を考えてくれた。お蔭で思いのままに市中を走り回わることができた。3人で中学生の昔に返ってペダルを踏んだ。どこを走っても、どの横丁に入っても昔の記憶が蘇って、長い間の望みが叶えられた。

和田君と東京を発つ時の約束で喜多方の締めくくりは源来軒のラーメンと決めていたので、折角星君が用意した席を断って、郷愁の味を楽しみながら幕にした。